

西要寺だより

第122号 令和8年7月12日



今号の「西要寺だより」では、「永代経法要」「4月の定例法座」などのご報告をしたいと思います。

●永代経法要のご報告

5月24日・25日の両日、永代経法要をお勤めしました。初日（24日）には、私（住職）・前住職・娘に、3月に得度をした長男も加わり、4人でお勤めしました。長男にとっては初めての法要出勤で、ご参詣の皆さまにも初々しさを感じていただけたのではないかと思います。



『仏説阿弥陀経』のお勤めの後は、谷川弘顕先生がユーモアを交えてご法話をしてくださいました。



谷川先生は先日、大学時代の下宿仲間と50数年ぶりの同窓会を持たれたそうです。久しぶりに会えば、思い出話よりも体調や持病、通院の話ばかり。「昔はよかったなあ」と愚痴を言い合ったとき、ある友人が「谷川さん、順調やから」と返してくれたそうです。諸行無常の道理からすれば、衰えていくこと自体が、実は「順調」なことなのだ——そうした気づきを、先生はユーモアたっぷりに語られ、会場は笑いに包まれました。

先に浄土へ生まれられた方は、あとに残る私たちを導いてくださる。私たちもまた、そのみ跡（あと）を慕（した）いたずねて、後に続いていく——先生は、道綽（どうしゃく）禅師が『安楽集』に「前（さき）に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前（さき）を訪（とぶら）へ」と示された導き合いの世界を語られ、絶えることのないいとなみこそ「永代」の心があるのだと教えてくださいました。

そのうえで先生は、私たちが葬儀の折に口にする「生前中はお世話になりま

した」という言葉を取り上げられました。「生前」とは文字のうえでは、浄土へ往生される「前」のこと。しかし先に往生された方は、今も私たちを導いてくださっています。そのご恩は「生前」だけのものでしょうか。今も形を変えて続く仏縁ではないか——先生は、私たちの言葉の習慣に問いを差し向けられました。

「生死」は仏教では「しょうじ」と読み、「生きるか死ぬか」と切り分ける世間の「生死（せいし）」とは異なり、生きることと死に向かうことが一つに重なり合っている有り様を指します。先生はこれを「生死一如（しょうじいちにょ）」と呼び、紅葉にたとえられました。色づいた美しい表を見せながら、裏も見せて散っていく紅葉。その美しさと、地へ落ちていく歩みは、同じ一枚の葉が見せている、ひとつの姿。私たちも、いままさに、その無常のなかを生きているのです。



ところが私たちは、「煩惱具足の凡夫」と頭では受け入れているつもりでも、つい他人と比べて自分を慰めてしまう。そうした老いに向き合う難しさを、先生は包み隠さず語られました。そのうえで紹介されたのが、『無量寿経』に説かれる「仏仏相念」——仏さまと仏さまとが、互いに念じ合っておられる世界です。浄土に往生された方々も、このはたらきのなかにあつて、私たちを励まし導いてくださっています。家族の間で交わされる気遣いの言葉も、時には厳しい言葉も、すべて仏さまのお導きとしていただいていたのではないかと示してくださいました。

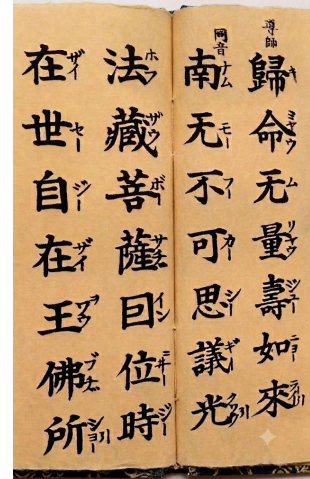
無常のなかを生きている私。「煩惱具足の凡夫」と頭では受け入れているつもりでも、老いに素直に向き合えない私。阿弥陀さまは、そんな私を、大悲のおこころで包み込んでくださっています。先に往かれたご先祖、亡きご家族も、今も私たちを見守り、「後を導く」存在として、すぐそばにいてくださっています。永代経法要は、その大悲のおこころと、ご先祖のお導きを改めて思う、大切なご縁です。ご参詣いただきました皆さま、誠にありがとうございました。

これからも、お聴聞を通じてあらたな気づきをいただき、お念仏申す身となって、こころ安らぐ、ほっとする時間を、ともに持っていきたいと思います。このたびお参りのご縁がなかった方も、次はぜひお参りください。皆さまのお越しを、こころからお待ちしております。

● 4月の定例法座のご報告

4月22日、定例法座にて、高槻・行信教校講師の星野親行先生にご法話をいただきました。星野先生は終始和やかに、『正信偈（しょうしんげ）』冒頭の二句に示された「南無阿弥陀仏」のころを、分かりやすくお話しくださいました。

ご法話は、その二句「帰命無量寿如来（きみょうむりょうじゅによらい） 南無不可思議光（なもふかしぎこう）」から始まりました。私たちが日頃お称えする「南無阿弥陀仏」は、もとはインドの言葉の発音をそのまま漢字に写した音訳です。その音だけでは意味が分かりませんので、意味を表す言葉として添えられたのが「帰命無量寿如来、南無不可思議光」という意識です。「帰命」も「南無」も、どちらも「おまかせします」という意味。



「無量寿如来」も「不可思議光（仏）」も、どちらも阿弥陀さまのお名前です。つまり「南無阿弥陀仏」とは、限りない命、限りない光であられる阿弥陀さまに、この身をおまかせします、というお言葉なのです。

また、お勤めの結びに必ず出てくる「往生（おうじょう）」という言葉についても触れられました。大阪では「雨に降られて往生した」のように、「困った」という意味で使われることがあります。星野先生は、この大切な言葉が世間で気軽に使われていることに苦笑いをされながらも、「往生」の本来の意味を改めて教えてくださいました。「往生」とは、「先立たれた方々が阿弥陀さまと同じお悟りの身に生まれられた」ということであり、「私たちもやがてならせていただく姿」でもあるということ。亡き方を「どうしていらっしゃるだろう」と心配するのではなく、「阿弥陀さまのはたらきのもと、往生をくださったのだと仰がせていただく」ことで、寂しさの中にも安心をいただけるのだと、お話しくださいました。

今、私たちがこうしてお念仏をお称えできること自体が、阿弥陀さまのはたらきであり、また先立たれた方々が確かに往生されたことの証（あかし）でもあります。星野先生のご法話を通して、日々のお念仏の意味を改めて味わい直すご縁をいただきました。ご参詣いただきました皆さま、誠にありがとうございました。



○ご報告

このたび、私（住職）の長女が、7月8日に男児を出産しました。

当山の法務は、これまで私（住職）と長女、前住職の3名で行ってまいりましたが、長女が産後間もないため、特に週末や私の大学講義日（月曜日）には、高槻にある行信教校より、若い僧侶の方に法務のお手伝いに来ていただいております。また、長男も学校の休みの日にはお参りに加わっております。月参りの際、同校より僧侶が伺わせていただくこともございますので、あらかじめご承知おきください。

◎西要寺行事予定◎

【認知症講座】

7月26日（日）午後2時より

講師：尼崎市「立花南」地域包括支援センター

場所：西要寺本堂

【盂蘭盆会法要】

8月13日（木）14日（金）15日（土） いずれも午前11時より

場所：西要寺本堂

※過去帳をご持参ください。

ホームページ（saiyouji.com）



または ^{さいようじ}西要寺 と検索ください。

浄土真宗本願寺派

^{さい}西 ^{よう}要 ^じ寺

661-0024 尼崎市三反田町1-7-27

TEL 06-6429-8241